

安^あ

芸^{きの}

守^{かみ}



久安二年（一一四六年）春。

この日、景弘は、父頼信と田所の伊佐と共に、京都六波羅の平家屋敷にいた。年明けに安芸守に任官した平清盛の披露が、平家の棟梁で清盛の父である平忠盛によって催されていた。ここに招かれたのは、都に赴いてきた安芸国の荘園主や郡司など執政官で、忠盛は六波羅の屋敷に集め、引見していた。

清盛は、二十九才。安芸守に任じられたばかりの、色白で体躯に優れた偉丈夫で、佐伯頼信は、自分たちの領地である安芸国佐西郡と嚴島神社の社領を国守として司ることになった若き武人に、胸が弾む期待感をもって眺めていた。

景弘は、十七才。まだ少年の面影を残していたが、背丈は既に父のそれを上回る偉丈夫ぶりをみせていた。目鼻立ちのはっきりした顔は、母譲りであった。邪気のない目を向けられた大人たちはこぞって景弘に好意を抱いた。景弘の駢りのない顔の屈託のなさに、多くの大人たちは、気持ち解きほぐされた。

神官姿の父頼信や田所の伊佐と居並ぶ中で、景弘は烏帽子に白絹の水干を纏い、腰には太刀を佩き、阿品の海風に鍛えられた肌には精悍の色が匂っていた。

景弘にとって初めて上った都であった。

そして、六波羅の平家屋敷の武骨ながら風趣に富んだ付まいと広い敷地に、景弘は圧倒される思いでもいた。

清盛は、接見の場の庭先に、黄覆輪の鞍をおいた馬を繋ぎ止め、座敷内には、武将らしく自分の鎧兜を

飾り立て、それを披露していた。

大鎧は、真向や吹返しに煌びやかな金と朱の飾りが施され、それは一際並み居る人々の目を惹いた。胸板、大袖、弦走りといった鎧と直垂、草摺りの豪華さは、絢爛の一言に尽きた。

鎧兜に並んだ陣太刀を架けた式台の両脇には、煌々と明かりが灯され、それは清盛の「武」の威光を示すものだと、景弘は思った。

腰刀一本に帷子姿の清盛は、若き公達ふうの姿で、出陣に臨む武将のようないでたちは英気に満ちていた。

備前守に任せられていた平忠盛が、山陽・南海道の海賊を追捕したのは十七年前のことであった。この海の合戦が、父の佐伯頼信の初陣で、忠盛の手勢として安芸の船侍たちを率いて討伐に加わった。功あつて忠盛の信を受け、翌年にも忠盛は頼信を召すと、海路の西播磨から小豆島周辺や備前の海域の島嶼に群居する武装船集団への宣撫や恭順の働きかけを命じた。

安芸国において、頼信が率いる佐伯軍団は海の軍団でもあった。これは強固な瀬戸内の「警固衆」を組織化することに繋がり、そのことを忠盛は高く評価していた。

若い景弘に目を留めたのは、忠盛であった。

「そこにおるのは、頼信どのが息であられるや」

忠盛は、旧知の頼信に声をかけた。

「我が嫡男、嚴島神社神主家の禰宜を務めおります景弘にてござりまする」

「よき顔色の若者かな」

「西国の海辺育ちにて未だ礼儀作法も弁えておらず、口の利きようも礼に適い申しませぬ。ただ幼少より嚴島山中にて荒修行し、漁の技に長け、日星月や潮の運びに蒔蓄ござれば、あるいは瀬戸内の水路にも詳しく、警固衆の手引き合力に埒を明けるか……と」

日頃控えめな頼信は、この日、珍しく長広舌をふるった。

己が長子清盛の安芸守任官に、父忠盛の並々ならぬ助力があったことは、多くの者が承知していたことであつた。

清盛が白河院のお胤という噂は、公家にあつては知らぬものはなく、白河院が寵愛していた祇園女御を忠盛に下賜した際に、女御の胎内には御子が宿っていたということを、公家や廷中の女房たちは声を潜めて語り合つた。

「お祇園さま」

祇園女御は、そう都人から敬愛をもつて呼ばれた。

忠盛が白河院の警護侍であつた頃、院が祇園女御の許を訪れる途中、祇園社近くの夜道にさしかかると、物陰に異様な人影が目につき、

「あの怪しき影は、我に害するものかな……」

と戦き恐れた院は、供の忠盛に「斬つて捨てよ」と命じた。

命を受けた忠盛は、その怪しい物影に冷静に目を凝らし、院を安全な場所に留まらせ、その場を離れていったが、間もなくして、その正体を見届けると、院の許に馳せ戻った。

「かの者、怪しからず！」

この辺りに住まいするもので、雨に笠を被り、蓑を纏いおりますれば、暗闇に物の怪と見えたもの…：いらざる殺生は、院の御為にはならず、と冷静に説いた。

この時の沈着な対応に、院は忠盛の優れた資質を見て取り、警備の長に取り立てたということがあった。清盛が誕生したのは、元永元年（一一一八年）。忠盛は二十二才。若くして父になった忠盛は、産まれた男子への姿勢は実の親と変わることなく、清盛を自分の嫡子として乳母をつけ、扱いも「武士の子」として育てた。

「これぞ、忠盛どのの男の器量というもの」
そう、頼信は思った。

館の廂ノ間と呼ばれる一段高い屋内の、開け放った戸の間から、ひっそりと座っている藍色の打衣姿の女性が見えた。

「この日、祝いに祇園の庵からやってきた…：お祇園さま」
父にいわれて、景弘はじつと目を凝らした。

「あのお方が、祇園女御…」
忠盛は、この年、五十才。初老であった。

「女御は、お幾つであられようか…」

景弘は、既に老境に達している筈はずの女御の涼やかな面立ちを目にしながら、忠盛どのと齡よわいは変わらぬ筈はずと、思った。

保安四年（一一二三年）、平忠盛は弱冠二十七才で越前守に任官した。

幼少より目にしてきた伊勢の海への思いからか、海の向こうにある見知らぬ国への憧憬どうけいが、忠盛の心を捉えていた。

越前国の南端にある敦賀つるがは、天然の良港を持つことで知られ、古来、日本海を通じた中国や朝鮮との交易の中心として栄えていた。当時、対外的貿易の正式な窓口は九州の太宰府にあったが、朝廷は活発な交易を望まず、ここを通じた取引は低調で、縛りのない敦賀を通じた私貿易が幅を利かせていた。

越前守になった忠盛は、敦賀に入ってくる唐物からものを都の貴族に売ること、膨大な利益の得られることを直感した。

当時の大規模物流の主役は水運だったが、敦賀から京の間には水路がない。そのため唐物を京に運ぶには陸路に頼らざるを得ないものの、盗賊が頻出していた。これを平氏の兵力を投入して解決し、大量の唐物を都に持ち込むことに成功した。

こうして忠盛は敦賀を通じた宋との交易で平家の財政基盤を確固たるものにすることに成功した。十年後、忠盛が鳥羽院の院司で九州肥前の神崎荘を知行した際、太宰府を活用して、瀬戸内海航路から水路で都に通じることに目を向けるまでこれは続いた。

忠盛は敦賀の地にある氣比神宮けひに熱心に参詣した。この北陸随一の大明神は、航海安全の神である。日本海の荒波を渡ってくる貿易船のつづがなき安全航海は、船乗りたちの命を守ること以上に重要だった。

忠盛はここで、空海が遣唐使になる前の修行中に何度か氣比を訪れ、遣唐使として出発する前にも安全祈願に訪れたことを知った。また弘仁七年（八一六年）唐から戻った空海がやって来て、氣比神宮の末社である「金神社」の神鏡を自ら開山した高野山金剛峯寺こんごうぶじの鎮守神として遷うつしたという。

さらに「もし安芸の嚴島神社と氣比神宮に何かあれば、高野山の私財を投げ打つてでも復興に尽くさなければならぬ」との空海の遺言があったことを知って、忠盛は空海がこの氣比神宮に深く関わっていたことに強く興味を持った。

「景弘、そなた丹にというものを存じておるか」

頼信に問いかけられた景弘は、

「あの、みづかねのことでございますか」と応えた。

金銀の精製にも欠かすことができない「みづかね」は、金属でありながら、液状の「命ある銀」といわれた。古来、寺院の建設に使われる高価な「丹に」は、辰砂しんしゃを原料とした塗料であり、神社に欠かせない「朱」色を施すための貴重品であった。

中国でも古くから珍重され、不老長生の秘薬として歴代の皇祖が捜し求めてきた。

「わが宮島の弥山みせんを開かれた空海上人は、高野山の修行中に水銀を含む辰砂しんしゃを見つけられ、唐滞在中に、このみずかねで得た資金を遣っていたと言うぞ」

氣比でそれを知った忠盛は、高野山の山深く密ひそかに採掘し、宋との交易の輸出品目の中に辰砂しんしゃを加えたことは知られている。

「こうして、忠盛どのは、日宋貿易で平家に富をもたらすことで、氣比神宮への崇拜を深め、氣比はさらに栄えた。と同時に空海上人への敬慕は、清盛どのにも受け継がれているに違いない…」

熱心に語る父の話聞いて、景弘は嚴島神社と氣比神宮が見えない糸で紡紡がれていることと、空海上人との深い因縁を感じていた。

忠盛が国守として最も優位な播磨守に任ぜられたのは、清盛の安芸守任官と同じ時期である。忠盛は、自らの播磨守就任については、殆ど晴れがましく宣することなく、屋敷内は清盛の任官の祝い一色であった。

忠盛は、政治・軍事両面で多彩な業績と同時に、芸術の才にも長け、和歌の道や宮廷人としての作法や教養なども高く、祇園女御との強い絆きずながあったことも忠盛の才を実らせることに役立っていた。

清盛は、そんな父と母の訓育を受けて成長していた。

特に海運への父の執着は、宋との交易を引き継いだ清盛にも受け継がれていた。

「清盛どのは、父忠盛どのより幼少の頃から瀬戸内の海賊掃討の戦話を聞かされていたに違いない…」
伊勢平氏は、もともとが海の武人。

「清盛どの自身も、年若な頃より海の合戦に加わっておった…」

忠盛は清盛を戦場に連れて行ったという。

「あるいは、異国との交易の話も…」

頼信は、この優れた父の庇護ひごの下に成長した清盛を目にしながら、知力と胆力に勝る父を越える器量があるかどうかを量っていた。

頼信は、自分の嫡男である景弘への思いを重ねていた。

「父子鷹おやこたか…」

既に不惑の齡よわいを幾つか越えていた頼信は、心の中で、そう呟つぶやき、もう一度、清盛の面差しを思い浮かべていた。

六波羅の屋敷で行われた清盛の安芸守任官のお披露目は、そんな平家の、ひたひたと寄せる海の上げ潮にも似た活気があった。

父頼信は、清盛より一回り年上であったが、年齢を越えた若き国守への期待感に、ひどく潔い、わくわくする父の思いが景弘にも伝わってきていた。

「清盛という男に賭ける…」

父頼信の心に宿った新しい神社への思いを、景弘は深くかみ締めた。

景弘たちは、清盛の安芸守任官の引見の場に列席するため、六波羅にも近い祇園社の宿坊に滞在していた。

都に上る地方の神官たちの多くが、この祇園社の宿坊に逗留した。彼らは、神祇官の鑑札を携行していた。祇園社は、別名「祇園精舎」と呼ばれる。現在の八坂神社である。

精舎とは、仏道修行する者の住まいをいい、後に寺とも呼ばれるようになった。

東山の南麓の小高い丘の上にある社は、清水寺の参道に近く、ここ祇園社界隈の賑わいは、都一の人出であるといわれた。

この日、景弘は、前日の清盛謁見の昂奮が残っていた。

景弘は、供も連れず、宿坊から祇園社境内に一人散歩に出てきた。

祇園社の境内には、折からの梅の花を見物する花見客や参詣人らが群れていた。物売りが露店を出し、僧兵相手に春をひさぐ女たちの姿も垣間見え、景弘は、若者らしい気後れと好奇心に包まれていた。

一人の女に目を留めたのは、祇園社の今を盛りにつけていた白梅の中であった。

まだ若く、美しい容姿と物静かな気品に景弘は心惹かれた。

女は董色の頭巾を被り、山吹色の小袖に水色の女袴を穿いていた。顔を隠した頭巾の中から白い面貌が覗き、野性の動物のような黒目が光って見えた。

「いったい、何者か……」

女は居合わせた景弘に臆するようすもなく、正面から視線を合わせ、しばらく見つめあった後、ふいにっこりと笑みさえ返したのであった。

「お前さまは…」

鈴を鳴らすという謂いがあるが、この日の花にも比す玲瓏の響きを、景弘は耳に刻みつけられていた。

「お見受けしたところ、この社の神主さまであられましようや」

「いや、わしは、西国の巖島と申す瀬戸内の島の神主家の者…」

景弘は、そう自分のことを明かした。

白絹の水干に腰刀を差した姿は、神主家の者という身分をあらわしていた。

祇園社の境内は寺社の管理をする公家の役人の領分であったが、叡山の僧が仕切り、公儀の支配が及ばぬ場所になっていた。

「お前さまにお願いがござりまする」

女は、祇園社の境内で参詣客相手に、易札を売りたい…と、告げた。

「易札…」

易札とは、神籤のことである。

女は、参詣客の卦を占うことを生業にするものと明かし、差配さまにその許しを願い出たところ、

「差配の者の中には私のような女に無理難題を申しかけ、不埒な仕儀に及ばんとする者もあり…」

女は、思いがけないことを、景弘に訴えかけていた。

「それで、このわしに、その口利きをせよと申すか」

景弘は狼狽しながらそう尋ねた。

「このような頼みを致すなら相手をよく見定めてかからねば、見知らぬ者は、そなたに不埒な振舞いを仕

掛けることもあるう」

景弘は精一杯大人びた口を利いた。

女は、景弘にじつと目を向けたまま短い間絶句していたが、顔を綻ばせると花が咲いたような笑顔になり、

「お前さまなら、かまいませんぬ…」

と、いった。

「安芸国嚴島神社神主家の佐伯景弘と申す」

と、景弘は改めて名乗った。

「わらわは、芙蓉ふようと申しまする」

景弘は、嚴島神社神主の父頼信に帯同して安芸守に任じられた清盛の引見の場に列したことを芙蓉に語った。

「清盛さまに…」

芙蓉と名乗った娘は、喜色を表にして景弘に熱い眼差まなざしを向けた。

「そなた、幾つになる」

と、景弘は尋ねた。

「十六にござりまする」

景弘は、頭巾を取った娘の美しさに思わず心の中で呻うめいていた。

「京の暮らしは、もう長いのか」

「都に出てきて、三とせともなりましようか」

仁和寺の草庵に住む師の許で巫女の修行を積んでいる芙蓉は、その名をその師より授かった…という。

「巫女の修行…」

草庵には、師と仰ぐ尼僧がおり、仏の道の修行のほか、和歌や書、歌舞音曲、あるいは公家に仕える女官としての嗜みなど、日々修行の日を重ねていることを、芙蓉は景弘に語った。

「卦を見るも、修行の一つ…」

都に陰陽道が流行り、卦を占う者も、参詣人の多い寺社の境内で生業にしていた。

「何故、わしにかようなことを…」

と、景弘は尋ねた。

「お前さまには、安芸守となられた清盛さまがついておられる」

お前さまは六波羅の屋敷に赴かれ、若殿にお目どおり適うたお方…。祇園社境内での易札売りのお口添えなどまことに容易いこと、改めてお願い申し上げます…と、芙蓉は微笑んでみせた。

「わしに、そのような力があると…」

芙蓉は、縋るような目で景弘を見つめた。

「ご庵主は、いかなるお人か…」

「えらいお方にておわしまする」

芙蓉はそう短く答えた。